

北区の農村歌舞伎とは

明治30年(1897年)頃から、
現在の新琴似地区と篠路地区では、
人々の手で歌舞伎が華やかに演じられていました。
娯楽の少なかった当時、歌舞伎は大いに人気を博しましたが、
札幌中心部で活動写真(現在の映画の前身)の上映や
演劇を行う劇場がオープンしたことなどにより、
若者の関心は歌舞伎から離れ、新琴似歌舞伎は
大正5年(1916年)に、篠路歌舞伎は昭和9年(1934年)に、
それぞれ終焉を迎えます。

それから50年以上の時を経て、
地域の人たちによる復活公演が行われ、現在、
北区の農村歌舞伎は、「新琴似歌舞伎伝承会」、
「篠路歌舞伎保存会」によって、
北区の貴重な財産として受け継がれています。



「本朝二十四孝」の装い。昭和9年



上)新琴似中学校の生徒による歌舞伎公演
下)篠路中央保育園の園児による歌舞伎公演

〈参考文献〉

- ・高橋克依(2009)「篠路村烈々布素人芝居」響文社
- ・新琴似開基百年記念協賛会(1986)「新琴似百年史」
- ・札幌市北区役所総務企画課(2007)「エピソード・北区」

〈編集〉

札幌市北区役所 市民部地域振興課

〒001-8612 札幌市北区北24条西6丁目

TEL 011-757-2407

発行 令和7年(2025年)8月



現代に受け継がれる

北区の農村歌舞伎

新琴似歌舞伎

～田中松次郎と娯楽の殿堂「若松館」～



明治30年(1897年)頃、鳥取県から開拓農民としてやってきた青年たちが中心となり、4番通番外地の小さな神社で歌舞伎芝居などを演じたのが、新琴似歌舞伎の始まりでした。

座長格の田中松次郎は、芸名を「松楽」と名乗り、歌舞伎や義太夫といった伝統芸能を花咲かせようと、常設劇場「若松館」を建設しました。

開設は、明治43年(1910年)12月。場所は、現在の新琴似7条1丁目辺りでした。館内には、舞台、花道、見物席、楽屋、便所のほか、警察官席も備えており、収容能力は310人で、当時の新琴似村の人口の半数を収容できる広さでした。

客席は、土間でムシロ敷き、見物人は座布団を持参したといえます。入場料は、大人十銭、子ども五銭で、週に1度開館し、午後5時から11時近くまで上演。

歌舞伎、義太夫、新派劇、浄瑠璃、幻灯などが行われていて、総合娯楽施設として人気を博しました。当時を知る人は「のぼりやちょうちんがいっぱい飾ってありにぎやかなものでした」と証言しています。

若松館の隆盛と共に、新琴似歌舞伎は最盛期を迎え、農村青年たちのほか、屯田兵二世も参加。50人の大所帯となり、「太功記十段目」「神霊矢口渡」など出し物に磨きをかけました。後に、幌向、岩見沢方面への地方巡業も行っていたそうです。

若松館は大正5年(1916年)頃に閉館します。映画時代の到来により、若者が歌舞伎から離れ、経営が悪化したことが原因と言われています。建物は解体され、漬物工場の倉庫に再利用されました。華やかな芝居小屋の閉鎖と共に新琴似歌舞伎も終焉を迎えました。その後「スター」であった往時を懐かしみながら農業に精を出していた田中も、昭和37年(1962年)に85歳でその生涯を閉じたのです。

新琴似歌舞伎を地域に親しまれる文化として後世へ保存・伝承していこうという人たちの熱意により、平成5年(1993年)7月、「新琴似歌舞伎伝承会」が設立されました。最初は資料の調査・研究が主な活動でしたが、次第に復活公演への機運が高まり、平成8年(1996年)に、地域の人たちが演者となって、新琴似歌舞伎は80年ぶりに復活しました。

その後、新琴似歌舞伎伝承会と新琴似中学校が協力し、同校の生徒が歌舞伎を学び公演するなど、新琴似歌舞伎の魅力は今に伝わっています。



晩年の田中松次郎
(昭和34年9月撮影と伝わる)

上)劇場開設願
下)当時の歌舞伎台本

篠路歌舞伎

～隆盛の立役者「大沼三四郎」～



明治30年代後半、篠路村烈々布(現在の百合が原辺り)では、歌舞伎が盛んに行われていました。明治初頭に山形県からこの地に移り住んできた大沼三四郎は、指導者、座長として、篠路歌舞伎の隆盛を支えた人物です。芸名を「花岡義信」といい、後に篠路村長も務めました。

当時、耕作地の開墾や水害への対応など忙しい毎日が続き、賭博に手を染める若者もありました。そこで、風紀の乱れを防ぎ、若者の団結を深めようと、青年団「若連中」が結成されます。

明治35年(1902年)、この「若連中」が、烈々布神社の祭典で素人芝居を上演したのが篠路歌舞伎の始まりです。

その中心人物であった大沼は、役者として、また、芝居の指導者として優れた才能を発揮し、芝居はまたたく間に人気を集めます。

大正6年(1917年)、大沼は、篠路烈々布だけでなく、周辺の演劇同好者も芝居に参加できるようにと「素劇楽天会」を結成します。座員は50人にまで増え、その公演場所であった「烈々布倶楽部」には当時珍しかった人力の回り舞台も設置されました。

大沼は、優れた指導力を発揮して多くの若者を育て、篠路歌舞伎は最盛期を迎えます。

ところが、昭和に入ると、相次ぐ飢饉や水害のため村外への移住者が増加し、座員が減少します。さらに娯楽の中心が札幌に移ったことで、篠路歌舞伎は急速に衰退していきます。そして、大沼は、昭和9年(1934年)11月23日、集会所「篠路共楽館」の落成記念に行われた「花岡義信一世一代御名残興行」を最後に引退し、篠路歌舞伎は、33年の歴史に幕を下ろしました。

それから50年以上が経った昭和60年(1985年)、篠路コミュニティセンターの開館にあたり、篠路歌舞伎の復活公演が行われました。当時の篠路中央保育園の理事長を中心とした、地域の有志による公演でした。これをきっかけに、篠路歌舞伎を後世に残したいと、昭和61年(1986年)に「篠路歌舞伎保存会」が設立され、古い台本などの資料収集や保管、講演会の開催等を行っています。

また、篠路歌舞伎保存会の支援を受けて、篠路中央保育園の園児たちによる歌舞伎公演が行われるなど、篠路歌舞伎は今もなお篠路の地で受け継がれています。



「神霊矢口の渡し」の一場面。昭和9年